
拝啓、 Egregio Signore ,

麻生柚葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

拝啓、 E g r e g i o S i g n o r e ,

【Nコード】

N 6 0 6 2 M

【作者名】

麻生柚葉

【あらすじ】

E g r e g i o S i g n o r e , h o u c c i s o a

僕が愛した、たった一人の君へ

この手紙を送ります。

イタリア語は終末アリス様（<http://nanos.jp/abcd11174/page/21/>）からお題お借りしています。

Story 01 Egregio Signore, ho ucciso a

Egregio Signore, ho ucciso a

ご機嫌いかがでしょうか？

僕の方というと、君がいない寂しさでどうにかなってしまいそうです。

・・・君の方も、少しでもそう思ってくれているのなら嬉しいかな。

この手紙は、決して君へは届かない。

だけど、僕は君に送るためにこの手紙を綴ろうと思うんだ。

だからこれは僕の自己満足になるのだろう。

こんな事を書いたら、君は怒るかな？

今更だ・・・、なんて言って許してくれないかもしれないね。

見もせずに破り捨てるかもしれない。

逆に、馬鹿だなと僕を笑うかもしれないね。

もう、会うことの出来ない君に思いを馳せて

僕は、想像しかすることが出来ないよ

ねえ、君は今何をしていますか？

ねえ、君は今何を思っていますか？

ねえ、君は今・・・幸せですか？

いくら、問うても君は答えてくれないね

だから、僕は一方的でも良いから君に送ろう。

この手紙を、この言葉を
今更な、僕の思いを君に・・・

拝啓、

S
t
o
r
y
0
1
E
g
g
r
e
g
i
o
S
i
g
n
o
r
e
'
h
o
u
c
c
i
s
o
a

「
F
a
n
t
a
s
t
i
c
S
y
n
d
r
o
m
e
」
醒
め
な
い
夢
ス
ピ
ン
オ
フ

Story 02 Il primo amore, che ha amato

Il primo amore, che ha amato
a fine? ancora.

君が居なくなつたからこそ、気づいた思いがある。
失ってからこそ、強くなつた思いがある。

僕は、君が大切だつた。
僕は、君が好きだつた。

いや、“だつた”と過去形にしなくてもいいね。
現在進行形で、僕は君が好きなんだと思う。
この手紙を書いている、今でさえも

この思いは、可笑しいだろうか？

きっと君は、僕の思いを笑い飛ばすね。
君はそんな子だつたから。

愛の告白で顔を赤らめるような可愛い女の子じゃ無かつた。
そんな物、まやかしだと言ひ切るような子だつたね。

飾り気の無い、そんな君。

不思議な力も可笑しな力も持って無かつた、そんな君。
可愛い性格も、愛くるしい仕草も持って無かつた、そんな君。

けど、

ただ、僕の傍に居てくれた君が好きだ。

もし、君が今でも僕の傍に居たとしても
君はこの思いを受け取ってはくれなかっただろうね。
だけど僕は胸を張って言えるよ。

最初に恋したのも、最後に愛したのも、やはり君でした。

Vedo un sogno mi auguro la sua
magia

いつでも願ってた。

素敵な魔法があれば幸せになれるのにつて

そんな反則的な力が僕にあれば、少しお話の結末は違っていたら
う？

君は幸せじゃなかったかもしれない。

でも、少なくとも僕は幸せになれた。

そう、思わないかい？

幸せは自分で手に入れる。むしろ奪い取る

これが君の口癖だったね。

君の幸せを奪って、僕が幸せになれば良かったんだけど。

僕の幸せは、ごっそり君が取って行ってしまったようだね。

と、なると

君は今とても幸せなんだろう。

幸せそうに微笑んでいる姿が目には浮かぶよ。

それなら、それで良いのかもしれない。

悲しんでいる君を想像するよりは、楽しんでいる君を想像する方が
ずっと楽だ。

それに僕の気持ちもずっと穏やか。

だけど、ちょっと苛つくかも。

だって、君は僕の知らない所で幸せなんだ。
それは少しずるいと思う。

想像だけで、こんな風に思うなんて馬鹿みただけだね。
想像する事を止められないんだ。

ねえ、君はどう思う？

愚かな事だと分かっていても、僕は願わずには居られない。

ずっと夢を見ていられる魔法があればいいのに

Story 04 Allontana da lui, manon dimenticare.

Allontana da lui, manon dimenticare.

君に二度と会うことが出来なかったとしても。
君の声を二度と聞くことが出来なかったとしても。
神が僕たちの記憶を消し去ろうとしても。

僕は、約束しよう。

ノスタルジアにはならない事を
神に・・・いや、君に誓うよ。嘘じゃない

往生際が悪いつて？

仕方ないだろ。これは君に似たのさ。
どれだけの間一緒に居たと思っっているの？
少し君の性格が移ってしまったみたいだよ。
どう、責任取ってくれるのさ。

それなのに、それなのに
君は僕にとつての水の様な存在だったのに。
勝手に消えちゃうなんて酷い人だ
挨拶さえ、無かっただろう？

だけど、分かっているさ。僕だって。
君が望んで消えた訳じゃ無いって事は。

君が逝って、もう随分経つ。

ねえ、いくらなんでも君が死ぬには早すぎただろう？

独りぼっちの僕は、これから先の長い時間をどうすればいいって言うんだい。

時が僕らを引き裂いて、世界が僕らを憎んでも
僕はこの思いを貫こう

離れてしまったけど、忘れるつもりはないから。

L' amore ? sinonimi di omicidio
e di me .

気づかなかったけれど

僕は君を愛すると同時に憎んでもいたらしい。

まったくもって、感情とは摩訶不思議さ

僕の思い関係なく育って一人歩きしてしまう事だっである。

自分の事は自分が一番理解していると、そう言いたいんだけどね。
やっぱり、制御できない感情なんてものもあるらしい。

じゃなきゃ、僕は君を殺したりなんかしないだろう？

あの時はまだ、僕は君が好きな事に目を逸らしていたのか・・・
気付いてなかったけどさ。

あつ、勿論大切な存在だとは思っているよ。

そんな君を僕は殺してしまったんだ。

その時の事は、曖昧で霽がかかったように、よくも覚えていないけど・・・

君が僕の傍に居ないって事は、そういうことなんだろう？

愛想をつかしたとか喧嘩したとか、そんな事で離れ離れになる様な
間柄じゃないし

そんな、ちゃんな絆でもない。

本当に、君は酷い人だね。

僕をかき回すだけかき回して、あっさり逝っちゃうなんてさ。

まあ、原因は僕かもしれないけどさ。そこはごめんね。謝るよ。

何？誠意が籠ってないって？

だって、仕方がないじゃないか。

僕が君を殺してしまったことは事実でも、その事実を僕は覚えていないのだから。

君は怒るかい？それとも許さないと、僕を憎むかい？

いや、馬鹿だなんて僕を馬鹿にするだけだろうね。

君はいつだって自分自身の存在に無頓着だったから。

ねえ、君は知っていた？

愛と殺意って同義なんだよ。

Story 06 Il destino di amore non cor

Il destino di amore non corris
posto.

君と僕が出会えた事は、そう、奇跡なんだろう。

誰も君を知る事は無い。

僕だけの君。

誰も君の可愛さを知らない。

知っているのは、僕たった一人だけ。

本当は皆に君の事を自慢したかったんだ。

誰よりも可愛い君を

そんな事したら、病院を紹介されそうだから心の中で思うだけだったけど。

ねえ、分っているの？

僕は君の容姿に惹かれた訳じゃない。

だって、僕も見えた事無いし。

僕は君の体に興味を持った訳でもない。

体を持たない君に、そんな事言っても無駄だろう？

君は、僕の事を狂っていると思うかい？

だけどこの気持ちには一点の曇りも無い。

そして、偽りは何一つ無いよ。

ただちよっと、気づくのは遅すぎたみたいけどね。

もう一人の僕

僕の中で生まれた君

君の事を、人はどう表現するのだろうか。

ただの妄想癖、もう一つの人格、何かに憑依されていた・・・

何とも言えはいいと思う。

僕にとつての君は大切に愛しい人。

例え、どんな存在であろうとも、僕の想像上の人だったとしても
愛しい人、それだけで良いと思うんだ。

君はそう思わないかい？

これは運命の片想い

Story 07 Non hai bisogno in questo mondo

Non hai bisogno in questo mondo
non? con voi

本当は、君を追って逝こうかとも思ったんだ。
けど必ずしも君に会えるとも限らないだろう？
確証の無い賭けはしないほうなんだよ。僕は。

それに、もし僕がこのまま後追い自殺したとしたって君の所にいけるとは到底思えないんだ。
だって、君は人間じゃなかったしね。

もしも、僕が君の所に逝く事が出来たとして、
君は僕の事覚えて無いかもしれないね。
君はいつだって他人の事を見てばかり
僕には見向きもしてくれなかったよね。

一緒に居てくれたのは、ただ僕から生まれたから、もしくは僕に憑依していたからだろう。

それ以上でもそれ以下でもない。

君にとっての僕はただの家だったに違いない。

愛着を持たない、しかも引越しの出来ない譲り受けた家。
そんな存在。

だって、どんなに君が僕に興味を持っていなくたって君は僕の中から出ることが出来なかったんだから。

だから、君から僕を迎えに来てくれる事なんて無いだろう。
天からのお迎え・・・

天使的な君を想像してみようとして、駄目だったよ。
だって、君はどちらかと言うと悪魔だろう？

迎えと言うより、君の場合は誘拐だよ。

君は君の気に入った人しか見向きもしない。

僕が君に攫って欲しいと願ったところで

気に入られていない僕は、君に誘拐される事は永遠に無いだろう。

だから、諦める事にしたんだ。

君にもう一度会うことは。

君を思い続けることは、一生止めるつもりは無いけどね。

本当は、君が居るなら、僕は天国だって地獄だって・・・
何処だって良かったんだ。

だけど、それすら君は許してくれないね。

君と一緒にならこの世界じゃなくなっちゃっていいんだ

Story 08 Sara spezzato per amore come

Sara spezzato per amore come i
n tutto il mondo

例え、世界が壊れていっても君を愛し続ければ良い。
そんなの簡単さ。

だって、君が僕の世界の全てだから

君が居なくなつて、世界が色褪せてしまつても壊れてしまつても
君と言う存在は確かに居たんだ。

それだけで僕は生きていける。

君を愛する、この思いだけで僕は生きていけるよ。

本当に君の存在は僕にとって大きいね。
ありがとう、と言つべきなんだろうか。

それとも、こんな思いを抱かせた君に出会つてしまつた事を悔いる
べきなのか分らないよ。

でも、君と出会わなかつた事を考えるとこの色褪せた世界でも不思議
と愛おしく感じるんだよ。

君が存在した世界だから、君が生まれた世界だから

この世界にもう、君が居なくてもこの世界ごと僕は愛せるよ。

こんな僕を、人は狂つていと言つんだろう。

だけどね、僕自身はそうは思わないよ。

人が何のために生きるかなんて、人それぞれだ。

不特定多数の大勢を普通と呼ぶならば、僕はそれに当てはまらない異端なんだろう。

だからといって、その普通が正しいとも限らないと思うよ。

そうは思わない？

何も考えずにただ過ぎる時間を流されながら生きている人と比べると、ずっと有意義だ。

ああ、話がずれてしまったよ。参ったね。

結局何が言いたかったのかと言うと、僕は君に人生狂わされたなんて思っていないし、勿論恨んでなんかこれっぽっちもない。

君の事を愛し続けるのは僕の勝手だし、僕がこんな風になってしまったのも君の所為じゃない。

だから君は気にする事はないし、気に病む事も無いよ・・・って言いたかったんだけど

君なら言わなくても気にも留めないよね。分ってるよ。

壊れていく世界で恋をする方法

Story 09 ? necessario , non si pu? uccid

? necessario , non si pu? uccid
ere .

今ではね、絶対に死んでやるもんか。
なんて、思っているんだ。

自殺とか、事故とか世の中には溢れかえっているけどそんなの関係
ないさ。

僕は、意地でも死なない。

だって、君は僕が殺したんだから
僕の事は君が殺してくれなくちゃね。
そうだろう？

いつだって待ってるよ。僕は
迎えても、誘拐でなくても構わない。
僕への死の宣告は君がしてくれ。

想像でこんな事を言うなんて馬鹿みたいな事だと思われるかもしれ
ないけれど

何でかな、理由の無い確証があるよ。

君は、きっとそういう存在だ。

今では僕の届かない所に居る君は、そう死神にも似た存在じゃ無い
かって思っただよ。

僕と君は切っても切れない絆があるから、そういう事が分るんだと

思う。

不思議だね。僕と君は離れていても繋がっている。そう考えると嬉しくて、なんだか心が温かくなるよ。

僕は君であり、君は僕だ。

なんだか変な感じだけど、言いて妙だろう？

今では分かれて別れているけれど、僕と君の一番最初の根本は同じなんだから

だからね、いつだって構わない。

いつまでも待ってるよ。君が僕の所に来てくれる事を

君じゃないと、殺せない

S t o r y 1 0 N o n ? m o r t o , h a s e m p r e a v u t o .

N o n ? m o r t o , h a s e m p r e a v u t o .

死後の世界ってどういう所なのだろう。

君の逝った世界を最近よく空想してみるんだ。

よく言う、地獄みたいに恐ろしい所なんだろうか。

それとも天国みたいに穏やかな所なんだろうか。

だけどね、君は何処でだって幸せを掴み取っていきそうだよ。

自分色に周りを染めて、自分の思い通りの世界に変えていきそうだね。
もはや、世界征服を果たしていそうで怖いよ。

君は喧しい所が嫌いな人だったから、きつとそこは静かな場所。

草花とか植物が好きだったから、きつと緑に溢れているんだろうね。
特に君は薔薇の花が好きだった。

容姿や形じゃない、その香りが特に。

だから、薔薇の香りがほのかに漂っているような甘い空間だろう。

そんな場所で気に入った人を周りに置いて

観察したりちよっかい出したりと楽しく過ごしているんだろうね。

元の場所がどんな場所であろうとも、もう君好みが変わってしまった
ているだろう。

本当に君は恐ろしい子だよ。

長年一緒に居た所為か・・・いや、愛の成せる技と言っておこう。
想像に難くない。

こうやって、考えてみると君は死んだという定義が間違っているように思う。

君は死んだのではなく、違う世界に行った・・・とかね。どうだろう？

僕の考えも的外れじゃないと思うんだけど。

だって、君が大人しくしているとは僕は到底思えないんだ。

大人しく僕に殺される君、大人しく僕の世界から弾き出された君・・・うーん。やっぱりどうもしっくり来ないよ。

切欠は僕にあったのだろうし、僕の所為なのは間違いないんだろうけど

君は嬉々としてそれを受け入れた。そんな気がしてきたよ。

やっぱり君は

死んでないよ、君は永遠になっただけ。

「Blu Let's promessa」

君に送ろう

青い青い薔薇の花を

君は薔薇が好きで、僕は青が好きだ。

だから、二人合わせて“青い薔薇”

素敵だろう？

青い薔薇の花言葉は「不可能」そして「奇跡」だ

君にピッタリだね。

これは僕と君が存在したという証

そして、僕と君との絆の印さ

生憎、青い薔薇の生花は存在しないから造花で我慢してね。

君の大好きな薔薇の香りは、香でも焚いておくことにするよ。

君自身に届けることは出来ないけれど、僕の部屋に沢山置いておくから

いつの日か、取りに来ておくれよ。

僕はいつだって待っているから。

君に気に入られるような人間になれるよう、進むのを忘れずにね。

何であるの時に見向きもしなかったんだろって後悔するくらいに良い男になってあげるよ。

全部全部、君の為に、君だけの為に

約束だよ。

絶対だ。

ねえ、ドルチエ

「青い約束をしよう」

Story 12 Un poscritto, Non ti ricompro

Egregio Signore, ho ucciso a
braccio, l'uomo che ha ucciso il tuo
figlio.

ドルチェ、君の事を愛しているよ。
世界中の誰よりも。

いや、世界を超えて、誰よりも

この思いは、僕の一方通行でかまわない。

君と出会えた事に感謝しよう。

他でも無い、君が僕の中で生まれてくれた事、僕の傍に居てくれた
事、とても嬉しく思うよ。

その事実だけで、僕は満足だ。

ねえ、君は僕と出会えた事、僕と過ごした時間、僕との思い出・・・
どんな事だつて良い、どんなに些細な事でも良い
少しでも、僕の存在が今の君の中にあるかい？
あると嬉しいな。そう願っているよ。

遠い彼の地より、愛を込めて ドウルセ

Un poscritto,
追伸、

Non t i r i c o m p e n s a m i e r o f e l i c
e .
報われなくたって僕は幸せだったよ。

青い薔薇の少女・醒めない夢でお馴染みのドルチェのスピノフ（？）な創作です。

彼女は元々人間ではなく、僕の中の人格の一つだったと。
二重人格のかたっぽ的な何かですかね。
何かが憑依していたと考えてくださっても、同じ事です。

ドルチェはドルセから生まれた実に曖昧な存在・・・らしいです。
しかし、しっかりと“ドルチェ”として意識も意思も人格も持つて居るドルセとは別の人間（？）です。

この小説は手紙と言う名の独白文ですが、徐々に事実が浮かび上がってくるというのをモットーに書きました。

初めは、会うことの出来なくなつた人への手紙
差出人は彼女の事が好きだったらしい
好きになつた大切な人と喧嘩別れ？

いや、実は彼女は死んでいた。

しかも病気や事故で死別ではなく、なんと彼が殺したらしい
犯罪じゃ？ 彼女は彼の中の一つの人格らしいから罪じゃない。だ
つて、彼女は“彼”でもあるから。

確かに彼女は彼の中から消えたけど、それを“死”と言うのは変かもしれない。なんか別の世界に居そうだよ・・・

とまあ、よく分りませんが。

彼が想像した彼女の世界はそのまんま正解です。

彼が一番彼女の事を理解してますしね。

逆に、彼の思考も彼女の思考と重なります。

伊達に“元が同じ”な訳ではありませんから、ドルチェは薔薇の中でも“青薔薇”を身に着けてる訳ですよ。

ドルチェが彼を好きか嫌いかわねれと、興味無いの一言でしょうけど。

最後まで読んでくださりありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6062m/>

拝啓、 Egregio Signore ,

2010年10月10日04時38分発行